



現代美術色彩博物誌

蜜蜂のいるカラーチャート

鷹見明彦一文



上—小林立 1933 EXPERIMENT 1
 1933 キャラリー美術館での展示風景
 下右—ジェームズ・タレル テレフォン
 ンブース 1998 テレフォン・ボックス
 型の装置に入り、強度を調整しながら、変
 化する光の状態を体験する。写真=渡部
 良治
 同左—マーク・ロスコ ホワイト・セン
 ター 1950 キャンパスに油彩
 141×206cm

次頁上—向山真樟 zoon 1998 ワックス、オイル カラー 120×160×7cm
 同下—ヴォルフガング・ライブ 松の花粉 1998 200×240cm Photo Hiromu Naita
 Courtesy Kenji Taki Gallery

オーロラの色

極地の天を彩るオーロラの光。うすいグリーン
のウェールが発光しながら、闇の中を生き物の
ように踊り動く。エスキモーの狩猟民たちは夜空
を駆ける光を死者の靈魂を彼へ導く火の火と信
じていた。

太陽は、太陽風という高速の粒子が宇宙空間に
吹き出している。オーロラは、太陽風が地球の磁
気圏に捕えられて発生する発光現象である。惑星
探査機によって観測された木星のオーロラがビ
ンクなのは、木星が多量に酸素が、地球のオーロ
ラがおもにグリーンに発光するのは、大気中に酸素
原子が多く含まれる証である。十一年周期で活
発化する太陽黒点の極大期にあたる今年には、ア
スカヤカサハのオーロラ・タワーでも、千変万化
する極光のパノラマにめぐり巡る確率が高い。

夢の色

古代人や遊牧民がその道跡や大地の上で行な
つた天竺の交感、ジェームズ・タレルの「スカイ

スペース」は、現代に感嘆させる。天窓が開いた部
屋にはいつ、刻々と変化する空の光と内部に備
えられた光源の調光によって生じる光のドラマを
体験するそのシリーズでは、頭上に開放されたフ
レームをとおして、色彩が光そのものであること
に目醒める時を捉える。

人間の知覚自体をメデイウムとするジェームズ・
タレルにとって、光と色彩は同義のマトリアルで
ある。(ガスワークス(テレフォン・ブースとい
った、パーセフチュアル「知覚の小部屋」シリ
ーズでは、密閉されたブースにはいつた被験者が
ネオン管やストロボライトの輝度および色変化に
ともなう視覚、視覚野、脳の視覚野などの反応に
よって、さまざまな知覚体験へと誘われる。(テ
レフォン・ブースのライトは、赤と青の「色だけ
だが、色の彩を混在する調光と輝度変化で、暗
光から目没のあいだに現象するよう多様な色と
光の変化が繰り返される。

レトロなヘアーサロンの場合、頭部に被るヴァー
の内部から微風のかわりに、青、緑、黄など、そ
れぞれの色光が照射される。身体や頭部全体が光
に包まれる「パーセフチュアル」の作品とは
ちがって、頭頂や後頭部への照光によって後頭葉
にある光への知覚機能に作用する。

の中の色彩がとらえられている。

熱のなかで流体となった色を供給したワックス
は、固体へと変化する瞬間に、溶融から流出しよ
うとする世界のはじまりの輝きを封印する。睡り
から醒めようとする瀬戸際の意識が、夢を強く追
憶するようになり、とらえられた色彩は、乳白色のフ
イルターを透過して発光する。固まっても流体で
あったときの温もりを残して、外気温に反応して
変化するワックスは、固体と流体、無機と有機と
いった区分の境界のメデイウムである。透過光と
なって放射する色彩は、未分化なまは、響き、
熱、触感、芳香の気配をとらえて、五感を包み
こむ。

花粉の色／蝶の色

夢のなかの色彩がわれわれの脳の内部に存在す
る光をワイドバットワックスのように、自然界が見せ
る鮮やかな色に引き寄せるとき、ヒトは、それ
と知らず内なる色彩の秘密に歩み寄っている。こ
の生態系というが単純にあって、とりわけヒトを
魅了しつづけてきた反響といえは、花と昆虫だろ
う。

花々の色どりの豊かさは、進化論的には受精を
媒介する虫へのサインとして説明される。ただし、

暗室の壁面を窓際より扱いた緑の背後にネオ
ン管や蛍光灯を仕込み、その色光と隣壁からのタ
ンクステン光によって錯覚をつくる「アパチー開
口」シリーズ、仕切り壁のある空間全体を色光で
満たす「ウェッジワーク」では、色彩が環境として
空間に浮き上がって存在したり、色光のウェール
が漂う実際にはない空間の奥行きを浮きだしてい
けるようなリアリティを覚える。

「ぼくたちは色彩の豊かさはつぎつぎと夢をみた
とき、目を開けて見るときよりもより強い現
実感や明瞭さを感じることがある。まるでなか
の思いつくようにね。……ぼくにとつて夢の中の
体験のような空間、色彩、時間感覚をもつよう
な作品をつくることはよく自然なことだ。」タレル
の夢の色彩は、彼の少年時代からの飛行体験から
も導かれている。

「ぼくは十六歳から飛びはじめた。空は本当に美
しい空間だし、光の美しいメデイウムだ。……太
陽が暮と空の間を照らす……オレンジと赤の光だ。
それからわずかな青春……まったく驚くべきこと
さだよ。」

ジェームズ・タレルは、あるインタヴューのなか
で、マークロスとアドラインハートにふれて、
自分の仕事をふたりの中間に位置づけたいといっ

た。たとえばミツバチの色彩がヒトと同じでないば
かり、それが人間にとつての色盲にあたる状態に
あることも実験で確かめられている。ミツバチは
ヒトにとつての赤色に対して色盲なのだが、視覚
よりも花々が放射する紫外線に敏感に反応する。虫
たちは、人間よりもセンサーを進化させて独自の
カラーフィールドを生きている。養蜂家にとしま
らず、ヒトのなかにもワロウの色素に感化され、
花粉を集めるようになった「アパチー」がある。

「私は花粉を自分自身に持っているかというこ
ひきつけられたのです。花粉は物質的な色彩をも
つています。それは人には、絶対に出せない色
というの、たかさんの性質のうちの一つにつ
きません。ちようと手にも色があること、また血
は赤いが、ただの赤い液体ではなく、ミルクは白
いが、ただの白い液体ではないのと同じです。」
「ワイルドワンダー」

ライアは、スタジオがあるビバック郊外の山
野で花粉を集める。採集は、はじはみのが咲き
はじめ、月半ばにはじまり、タンボポやんぼ
うげが咲く春を過ぎて秋までつづく。これらに
松を加えて、ライアが用いる花粉は、三、四種類に
限られる。タンボポやんぼうげの花粉は、黄褐
色で少量しか採れない。白っぽい松の花粉は、た

